

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 78

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 1541. コード進行とコードトーンの蓄積
- 1542. 論文執筆の内的必然性を掴むために
- 1543. 基底世界との合一
- 1544. 黒い巨大な金魚と白い大蛇
- 1545. 色即是空・空即是色と媒介者としての自己
- 1546. 科学・哲学・音楽
- 1547. 課題の続き
- 1548. 直接的な師・間接的な師を求めて
- 1549. 不毛な探究の停止へ向けて
- 1550. この世界の神々との邂逅
- 1551. 探究サイクル
- 1552. 意義喪失と意義再燃
- 1553. 不毛な試みに邁進する現代人
- 1554. 回るコマとそれを支える存在
- 1555. 燃焼と静けさ
- 1556. 自己、即、道:道、即、自己
- 1557. 余白の重要性と「銀行型教育」の弊害
- 1558. 学習理論と教授法の重要性
- 1559. 知識習得過程の観察
- 1560. 英文執筆と作曲実践の類似性

---

## 1541. コード進行とコードトーンの蓄積

台風のような激しい風と雨がどこかに消え去った。辺りにはまだ強い風が吹いており、先ほどまでの激しい風の余韻を残している。

今日は午前中に講義に参加し、午後からは教育科学に関する論文を読み続けていた。午後八時を迎え、ようやく今日の仕事を終えることができた。ここから就寝までの時間は作曲実践に充てたい。

一昨日と昨日に作っていた曲に手を加えようかと思ったが、それよりも先に、現在繰り返し視聴している、オンラインの作曲講座の続きを学習しようと思う。この講座のおかげで随分と作曲理論と作曲技術が身についたように思う。今はまだ二回目の視聴の最中であり、この講座は今後何度も繰り返し視聴することになるだろう。それぐらいに中身の濃い講座である。

今日、ようやくイギリスから、エドヴァルド・グリーグのピアノ抒情小曲集の楽譜が届いた。早速中身を確認したところ、私が範を求めるべきはグリーグだと思った。もちろん、他の作曲家の楽譜を分析し、それを自身の作曲実践に活かしていくことは長きにわたって継続させていく。しかし、グリーグが作曲にもたせた意味とその表現方法のあり方が、自分が考えていることと非常に似ているのだ。

それを踏まえると、私はグリーグの曲を随分と参考にするであろうと容易に予想される。今日、グリーグの楽譜の中身を確認した時に、それを強く実感した。グリーグが楽譜を通じて語っている言葉が、私に「これだ」ということを伝えている。

これからしばらくは、コードトーンの蓄積を意識的に行いたいと思う。既存の楽曲の中で、自分が好むものを抽出し、特に楽曲内の小節の中で自分を惹きつけるものをまずは対象とする。その対象に対して、コードを分析し、コードトーンを抜き出していく。そこからコード進行を分析し、それと合わせてコードトーンを蓄積していくような実践を行いたい。

その際に、誰の作品が元になっているのかを記録しておき、後々その原曲に立ち帰れるようにしたい。できれば毎日少しずつ、コード進行とコードトーンの蓄積を行うようにする。それらは、今後様々

---

なアレンジを施していくための優れた素材となるだろう。素材そのものを今は無から生み出すことができないので、まずは自分を惹きつける曲を素材としていくという方法を採用する。

コード進行とコードトーンの蓄積に並行して、現在繰り返し視聴している作曲講座で学習した技術を適用し、素材に自分なりのアレンジを加えていくということを行っていきたい。今からしばらくは、これらの実践を行う日々が続くだろう。2017/9/13(水)

#### No.187: The Situation in Education Turned My Interest to Evidence-Based Education

Our society becomes more and more oriented toward information technology. This trend floods into the field of education.

Since the early 21st century, terms such as “technology-enhanced learning,” “flipped learning,” “MOOCs,” and “big data” have started to appear in the field of education. These new terminologies have gradually changed educational practice and policy. In fact, a number of innovative schools attempt to incorporate information technology in order to enhance the quality of learning.

However, it seems that some schools recklessly try to implement it into educational practice. For instance, they are likely to lack ample knowledge of (1) scientific evidence of the effectiveness of technology-enhanced learning, (2) a strategic plan for implementation, and (3) a procedure for monitoring the plan. This issue turned my interest to evidence-based education. Saturday, 9/16/2017

#### 1542. 論文執筆の内的必然性を掴むために

昨日とは異なり、今朝は風も緩やかで、大きな雨雲も見えない。天気予報によると、早朝のみ晴れであり、それ以降は夜まで雨が降るとのことである。また、明日からも数日間は雨が続く。昨日のうちに、数日分の食料を購入していたため、今日からしばらくは書斎にこもって学術研究と作曲実践に打ち込もうと思う。

---

早朝の寒さに耐えられなくなったため、今朝から暖房をつけることにした。書斎に行き、今日の仕事に取り掛かろうとした時に、本棚に置かれている辻邦生先生の一群の書籍が目にとまった。

辻先生は小説家であったが、数多くのエッセーや日記を書き残した。私の目にとまっていたのは、辻先生の小説ではなく、エッセーや日記が形となった書物であった。本業の小説執筆のみならず、これほどまでに膨大な量のエッセーや日記を書き残した辻先生に対して、改めて感銘を受けた。やはり彼は、書くことを通じてこの世界を生き抜いた人なのだということ、今朝方にまた強く実感していた。

辻先生の残してきた仕事を前にした時、自分も学術論文の執筆に並行して、日記を書き続けるということが可能なのだという励ましを得た。私はまだ、辻先生が小説を作品として残したようには論文を創出することができていない。

論文の執筆に向けて、自分の中で必要なものを蓄積することは確かに重要でありながら、論文を絶え間なく書くことをせき止めている何かを完全に溶解させなければならない。論文を執筆するための知識体系を構築していくことは必要不可欠であり、実際に論文を執筆するための方法論を自分の内側に確立することも大切である。

同時に、そもそも論文を執筆することを促す環境の中に入るといことも大事だろう。立場上、今はまだ絶えず論文を書くことを後押しするような環境に置かれているわけではない。つまり私は、一つの論文を時間をかけて執筆すればいいという環境の中にいるだけなのだ。ここからは二つの順番が必要かもしれない。フローニンゲン大学での二年目が終われば、論文を絶えず書かざるをえない環境の中に身を置くというのが最初のステップだ。それはフローニンゲン大学の博士課程に進むか、米国の大学院に客員研究員として在籍すれば、そのような環境に自ずと自分が晒されることになる。

そこから二つ目のステップとして、絶えず論文を書かざるをえない環境の中で、自分の内側から論文を書く必然性を掴むということだ。私は以前、この二つの順番を逆に考えていた。すなわち、論文を執筆する必然性を内側に見出してから、論文を絶えず書く環境を提供してくれる場所に身を置く

---

という流れを考えていたのだ。しかし、実際にその活動に従事しない中で、自分の内側にその活動に従事するための内側の必然性を見出すのは極めて難しい。

論文を書こう書こうと思っても書けないのは、この順番を見誤っているからではないかと思うのだ。自分の内側で論文執筆の内的必然性を掴むことは、論文を書く中でしかなされない。それは少しずつでもいい。とにかく、日々論文について考え、日々論文を執筆する過程の中で、論文執筆の内的必然性を見出し、それを外側に一挙に開放していく。そのためには、ある意味、論文を絶えず書くことを強制するような環境に身を置く必要があるだろう。昨年に引き続き、この一年間もまだまだ私にとっては準備期間である。

絶えず論文を書くという内側の核はすでに見出されている。あとはそれが、内的必然性という激流とともに外側に表出するように促していくことだけが求められる。それが真に実現される日はもう少し先かもしれない。それまでの期間は、絶えず論文を執筆するという核が内側にありながらも、絶えず書けないという苦悩と向き合うことになるだろう。その苦悩と真正面から向き合い、苦悩を流し去る内的必然性の激流を生み出すために、準備の期間を終えたら速やかに、論文を絶えず書くための環境に身を置きたいと思う。それは別の国で成し遂げられることかもしれないし、現在の大学であれば、立場を変えることによって成し遂げられることかもしれない。

絶え間ない論文創出の課題を、全て内面の問題として捉えてはならず、仕組みや環境という外的な観点から把握していく態度が不可欠だ。2017/9/14(木)

#### No.188: Educational Science and Philosophy of Education

Educational science and philosophy of education are the most important realms of my work.

Today, I made a vow that I will never divert my work from them. Everything I think and feel from now would be always related with educational science and philosophy of education.

Following the courses in the present program at RUG, I can cultivate my knowledge and skill about educational science. Since philosophy of education has strongly captured my interest, I will continue to explore it by myself. Although there are a myriad of books I want to read about

---

philosophy of education, I will prioritize reading John Dewey's writings for a while. Saturday,  
9/16/2017

### 1543. 基底世界との合一

限りある早朝の青空を有り難く拝む。今はまだ雨が降っておらず、白く分厚い雲が見えながらも、空は晴れている。ぼんやりと書斎の窓の外に広がる空を眺めていると、そういえば、昨日の夕食時に不思議な体験をしたことを思い出した。

これは時々自分に起こる体験なのだが、食卓の窓から風に揺れる木々を眺めていた時、瞬刻瞬刻の無限な多様性に気づくという体験をした。より厳密には、それは単なる気づきではない。瞬間瞬間に生起する、二度と同じ姿を見せない無数の現象を知覚した時、それと同一化するという体験だ。つまり、瞬刻瞬刻の無限な多様性に気づくというよりも、自分がそれになるという体験なのだ。時間など流れず、流れるのは絶えず千変万化する無数の現象だけなのだ。

その無数の現象と自己が完全に同一化するという不思議な体験を昨日した。この体験についてもう少し考えてみると、瞬間瞬間に絶えず生み出される無数の現象と自己との不可分性に気づく。自己とは、それらの無数に生起する現象を観察する者ではないのだ。確かに、瞬刻瞬刻に生起する無数の現象に気づく自己は必ずどこかで立ち現れる。

しかし、それを越えた先があるのだ。それこそがまさに、それらの千変万化する無数の現象との完全な合一なのではないだろうか。もしくは、絶え間なく変化する種々の現象を生み出す基底世界を見出し、自己がその世界に落ち着くというよりも、その世界そのものになるのだ。つまり自己は、無数に創造される現象を目撃することを超えていく時、無数の現象を生み出す世界そのものの中に溶解し、その世界と完全に合一を果たすのである。

この表現は、昨日の夕食時の体験を見事に言い表している実感がある。自己という存在は、存在を生み出す基底から生み出された存在であるというよりも、その基底に他ならないという確かな感覚が、一夜明けた早朝の今もまだ残っている。

早朝の輝く朝日が、目の前の木々を照らしている。少しばかり強い風に木々の葉が揺れている。

---

輝く太陽や、辺りを吹き抜ける風、そして木々の存在に気付き、それらが刻一刻と変化を遂げていることに気づいた瞬間、自分がそれらであるということに気づけなければ、この現象世界の本質を掴み損ねている。それはこの世界を盲目的に生きていることに等しい。また、瞬間瞬間に変化する現象に気付き、それらが自分であるという気づきの段階に留まっていることもまた、道半ばである。

そうした気づきそのものが溶解しなければならない。気づきを生起させる世界の基底に触れなければならない。そして、自己がそうした気づきを生み出す基底に他ならないことを掴まなければならない。実際には、それは掴まれるようなものではなく、獲得されるようなものでもなく、常に絶えず今この瞬間にあるものなのだ。もはや、それについて言葉をいくら紡ぎ出しても無駄であろう。なぜなら、それは言葉が不可避に持つ二元性を超えたところにあるものであり、言葉によって生み出される境界線を超えたところにあるからだ。2017/9/14(木)

#### No.189: Our Preposterous and Futile Endeavor

Most people try to seek for their authentic self. Most people try to look for themselves. It is unfortunate that they are completely missing the point. Who can open an open door? How can our right foot kick itself?

It is impossible to open an open door because—needless to say—it is already open. It is asinine to encourage our right foot to kick itself. However, most people in this modern society make that kind of mistake.

As long as we continue to engage in such a futile endeavor, we will never find ourselves, which means that we will never be emancipated and liberated. Sunday, 9/17/2017

#### 1544. 黒い巨大な金魚と白い大蛇

今朝は早朝に、論文執筆について少しばかり考えていた。絶えず論文を創出していくためには、論文を書くという内的必然性を掴む必要があるが、そもそもそれを掴むための環境に自己を晒し、体系化された仕組みの中で実践を積んでいくことが重要だという気づきであった。そして、そのような

---

環境に身を置くための最後の準備期間がこの一年であるという意味付けを行っていた。その意味付けは決して誤りではない。

だが、もう少し付け加えるならば、この最後の準備期間において、作品としての論文を数多く執筆することはなくても、今後の論文の素材となりうるような文章を絶えず執筆していく必要性を感じている。つまり、この準備期間において文章を書かないということは考えられず、絶えず文章を書き続けることが重要だ。文章を執筆するという修練をもっと徹底的かつ自覚的に自己に課していきたい。

論文の創出に向けた準備期間において何も文章を書かないのであれば、絶えず論文を書く日など一生やってこない。これは論文のみならず、小説や書籍の執筆など、他の文章表現活動にも当てはまることだろう。とにかく、「習作」のような形で文章を絶え間なく書いていくことが何よりも重要だ。今私が従事している作曲においてもそれは言える。本格的な曲を作曲するためには、数多くの習作を創出していくことが必要なのだ。その過程を経なければ、何も生み出すことなどできないだろう。

要諦は、断片的なものでも小さなものでも構わず、表現物を外側に形として残していくことだ。それをしない者に絶えず何かを創造することなどできはしない。創らない者に、創造主は力を貸さない。実際に創る者だけに、絶えず創造活動に営む権限が与えられるのだと思う。断片的なものであってもいい。今日も小さな表現物を外側に形として残していく。

午前中の仕事に取り掛かろうとした時、昨夜の夢の内容が思い出された。昨夜の夢も印象的であり、特に夢の中に現れたシンボルが特徴的であった。夢の中で私は、イタリア半島のどこかの場所にいた。地中海の旅の最中、私はワニのような生き物を捕まえた。

どうやら私は、この生き物を捕まえようとしていたのではなく、他の生き物を捕まえるために地中海にいたようだった。地中海での滞在をもう少し楽しみたかったのだが、仕事の関係上、私は今住んでいる自分の国に戻らなければならなかった。それは現実世界で私が今住んでいるオランダではなく、夢の世界の中でしか存在しえぬ国だった。地中海から自分の住んでいる国に戻るために、私は小さな空港で飛行機を待っていた。

---

その空港は海の上に浮かんでおり、空港の待合室からは横にも下にも海が見える。出発の時間が近づいた時、私の手元には、地中海で捕まえたワニのような生き物がいることに気づいた。

空港の係員が、この場所から飛行機で一時間ほどの場所にある小さな島にそのワニを持っていけば、今回の旅の旅費が全て還付されるということを述べた。今回の旅費はそれなりの金額であったから、その話を聞いた時、自分の住んでいる国に戻るのではなく、その島に立ち寄ろうかと考えた。しかし、自分がなすべき仕事はその日の午後から入っていたため、私はその島に行くことを諦めた。諦めたはずだったのだが、なぜか私はその島に向かうための列車の中にいた。

飛行機ではなく、空の上を走る列車の中に私はいたのだ。その列車からは地中海を見下ろすことができ、列車の足元がガラス張りになっていて、しかも望遠機能が付いていた。私は、地中海の青さに改めて息を飲んだ。望遠機能を用いて海を覗いてみると、その透き通るような海に自分が飲まれていくような感覚があった。

しばらくすると、眼下に地中海とつながる大きな河が見えた。その河の水も透き通っており、河の下に何があるのかがはっきり見える。すると突然、その河を北から南に下っていく、黒い巨大な金魚を見つけた。その大きさは、大型タンカーと同じぐらいであり、私は面食らいながらも、その巨大な黒い金魚の泳ぐ姿に視線が釘付けとなった。

巨大な金魚が通り過ぎてからほとんど時間が経たないうちに、今度は、さらに驚くべき生物がこの河を北から南に下って行った。私の目に飛び込んできたのは、この世のものとは思えないほどに巨大な白い蛇だった。その長さや太さは常軌を逸していたが、蛇の白さはとても美しく、青々と輝くこの河に映えるような美しさだった。

黒い巨大な金魚と白い大蛇。それらが象徴するものと、それらが澄んだ河を北から南に下って行ったことにはどのような意味があるのだろうか。2017/9/14(木)

#### No.190: Like a Spinning Top and Like the Ground

My coffee maker told me that today's coffee was ready. I am just relaxing, drinking coffee.

---

Today's work will gradually proceed with full of relaxation. I notice that I, who continuously engage in some activities, am like a spinning top. On the other hand, I, who witness such an aspect of myself, am like a pivot of the spinning top or even like a ground supporting the spinning top.

Whenever I engage in some activities today, I want to notice that my essence is not the spinning top but the ground of it. Sunday, 9/17/2017

#### 1545. 色即是空・空即是色と媒介者としての自己

気づけば世界が夜に向けて準備をし始めていた。あと一時間ほどで夕食を摂る時刻となる。現在、様々な方々と成人発達理論を活用した研究やトレーニングプログラムの開発に従事している。

今朝は、そうした協働作業の中でもとりわけ大きなプロジェクトを共に推進している協働者の方とミーティングを行っていた。そのミーティングが終わりに差し掛かった頃、突然雨が降り始めた。ミーティングが終わり、書斎の窓越しから外の景色を少しばかり眺めていた。二台の車が交差した瞬間、様々な方々と協働し、日本の組織や社会に対して何か形を生み出していこうとすることの中に、確かに自分がこの世界で生きていることを感じた。

自分が自らの人生を確かに生きていることを実感するためには、自己の表現物を形として残すことが必要であり、自分がこの世界で生きていることを実感するためには、他者と協働で何かを形にしていくことが不可欠なのだとか気づかされた。もしかすると、この世界に形を生み出すことは、より重要な意味を持っているかもしれない。

形を生み出すことによって、形を生み出すものと合一する感覚がある。そして、形を生み出すものは生み出される形そのものと本質的に同じものなのだという気づきがある。

二羽の小鳥が激しい風に乗りながら飛び去るのを目撃した時、「色即是空・空即是色」という言葉が姿を現した。どうやら、自分が絶えず形を生み出そうとするのは、そもそも形を生み出すものと完全に合一を果たすためであり、形を生み出すものが本来の役割である、形を生み出すことを全うでき

---

るようにするためなのではないかと思う。自己というのは、本質的に「色(しき)」であり、「空(くう)」であり、それらの媒介者でもあるのではないか。

夕方、外の景色を眺めながら休憩をしていた時、この一年間に見た印象的な夢の全てを、一瞬の時間の中に想起するというような現象に見舞われた。この一年間の印象的な夢の断片が、一つの織物として織り成され、一つの巨大な夢になるかのような想起が起こった。それは数日前に見た虹のように連立的な流れだった。だが、この体験は一時的なものとして過ぎ去った。

体験が過ぎ去った後の私は、いつもと同じ平常心を持っていた。これはもはや当たり前なのだが、現実世界とは、覚醒意識下の世界のみならず、夢の世界も含めた世界のことを指すということを再確認した。

印象的な夢を書き留める際に、夢の世界の出来事や体感的感覚が、覚醒意識下の感覚よりも鮮明に感じられることがよくある。また、日々の出来事を記述する際に、それらが仮に夢の世界のものであった、と言われても何も驚くに値しない自分がある。それほどまでに両世界の出来事は、私にとってリアルであり、リアルでないのだ。

数日前に見たあの虹は、覚醒意識下の世界と夢の世界を繋ぐ架け橋のように思えた。虹が見えた西の空には、今はもう何も見えない。2017/9/14(木)

#### No.191: Desire for Creation and Construction

The more I engage in scientific research, the more I notice that it shares a commonality with music composition. A key feature in common between two domains would be constructiveness. In other words, both have an architectonic process in common for creation.

As scientific research requires me to follow systematic procedures to conduct research, music composition also expect me to comply with established rules to generate music.

The essential source to drive me to engage in both fields is not only my genuine ardor to create something new but also my exquisite rapture about the constructiveness shared in both domains; the former can be represented as a desire for creation, whereas the latter can be expressed as a

---

---

desire for construction—although they look similar, they are intrinsically distinct. Sunday,  
9/17/2017

#### 1546. 科学・哲学・音楽

昨夜は就寝前に、自分は何に集中して仕事を進めていく必要があるのかを考えていた。科学と哲学と音楽の三つの領域が乱雑に交差し合い、今はその渦の中にいるようだ。それら三つの領域に従事していると、時にその激しい渦に巻き込まれ、自分がどこにいるのかがわからなくなる。そして、自分がどこに向かっているのかもわからなくなってしまうことがある。

科学と哲学と音楽の全ての領域を探究する過程を通じてこの世界に関与することは不可能なのだろうか。どのようにすれば、それら三つの領域を別々の形ではなく、一つの統合的な調和のもとに探究することができるのだろうか。そのことに昨夜は少々頭を悩ませていた。

人間発達や教育を取り巻く問題について、哲学的な観点から主題を特定し、それを音楽の形にしていく。しかし、その際に科学をどのように関与させたいのだろうか。哲学、とりわけ教育哲学や美学、広義には人間発達を取り巻く思想と音楽を関連づけることは比較的容易に思える。人間発達や教育に関する現代社会の課題や問題を曲の中で提示し、それに対する思想的方向性を曲の形で表現していく。それを具現化させるイメージは既にある。しかし、ここに科学をどのように関与させていけばいいのかが定かではない。

私の中にある科学の立場がぐらつき始める。少々力のない案なのだが、例えば、科学的な枠組みを通じて楽曲を分析することを通じて、美の創出方法を掴み、それを自分の作曲実践に活用するということは十分に考えられる。楽曲を定量化し、非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチなど、私がこれまで探究してきた複雑性科学の手法を用いることによって、定量化されたデータを解析し、美の創出プロセスとメカニズムを掴んでいく。そこでの発見事項を哲学的主題を持つ作曲実践に適用していく、という道を考えることはできる。しかしこの案は、どうも哲学と音楽との微妙な距離を生み出しているように思える。

---

自分の中で、二つの領域と科学の領域との間に密着感がないのだ。この問題を解決するにはどうしたらいいだろうか。もしかすると、とりわけ科学というものを強調する必要はないのかもしれない。楽曲分析をする際の姿勢とアプローチそのものが科学的だとみなすこともできなくはない。

確かに、私が日々少しずつ楽曲の分析をする様子を俯瞰的に眺めると、それは科学的なアプローチであり、科学者の発想の枠組みに基づいたものだと述べることができる。だが、なんとか三つの領域を完全な調和の中で探究をしたいという思いが湧き上がる。こうした思いが湧き上がるのは、やはり今の探究方法がそれらの領域を分断的に扱っているということを示唆している。

科学と哲学と音楽を架橋し、一つの調和世界の中で仕事をしていくという試み。その実現に向けて、学ぶ必要のある事柄が沢山ある。同時にそれらは、単に文献を通じて学んでいくような類いのものだけではなく、それよりもむしろ、自らの手を動かしながら実践を通じ、さらには形を生み出しながら学んでいく類いのものだとすることを的確に認識する必要がある。

科学と哲学と音楽を分離させることなく、統合的な発想と方法を持って探究できる場所に行き、この試みに全てを捧げるような日々の実現を切に望む。2017/9/15(金)

#### No.192: Scientific Research and Social Commitments

I should be careful not to be entrapped into my inner realm that can separate the interior from the exterior world. Here, I warn myself of danger in my autistic attitude to the society. One of the foremost reasons for me to engage in scientific research is that it is based on social commitments.

Even my music composition requires a deep interaction with the society. I should engage in both activities on the basis of social commitments. Sunday, 9/17/2017

#### 1547. 課題の続き

昨夜の就寝前に考えていたことをもう一度考え直している。自分の中で、科学者として、哲学者として、作曲家として生きるという括りをどのように取り払えばいいのかという課題だ。それらひとつひとつの社会的構成概念で自らを括ろうとすることが、自分の仕事が科学・哲学・音楽の分離を促して

---

---

いるように思えて仕方ない。しかし同時に、そもそも科学・哲学・音楽の三つの領域が固有の価値を持つ独立した領域として存在していることも確かであり、それらの領域の名称が確かに三者異なることから、自らを前述の括りの中で捉えるというのも、ある意味仕方のないことかもしれない。

だが、仕方のないことでは済まされない感覚が自分の内側にあるのは事実だ。科学的研究成果を論文にし、哲学的探究成果を論文にし、人間発達を取り巻く科学的・哲学的な探究を通じて得られた事柄を曲の形として表現していく際に、それらが決して分断されたものではなく、包括的になされたものだとして自らを納得させるためには何が必要なのだろうか。

もしかすると、自分の中での最大の課題は、それら三つの領域を包括する根幹主題を明確に掴めていないことなのではないかと思った。それら三つの領域を包摂し、それらの仕事を統合的に推し進めるための、「これしかない」という究極的な主題を、私はまだ明瞭にしていないのではないか。

科学・哲学・音楽がどのような繋がりになっているのかを外面的に探究しても無駄である。つまり、それらの三つの領域の関係を説明するような文献を読んでいては全くダメなのだ。それは完全に方向が違う。方向のズレ以上に、私が行おうとすることの実現から逆に遠ざかる。外面的記述は一時の安息を心にもたらず、内側の課題を根本から解決することには繋がらない。

今自分が抱えている課題を解決していくためには、内側に絶対的な主題を見出し、その主題をもとに内側からその課題そのものを記述していくことが不可欠だろう。そして、そもそも今の私は、各領域に関する知識と経験が圧倒的に欠落しているということも考えなければならない課題だ。

これは人間に固有の欠乏感とも関係しているのかもしれないが、この課題を単純にそのような点に還元することはできず、事実としてそれらの領域に関する知識と経験が欠落しているというのは確かだろう。

昨日、先月に訪れたノルウェーのベルゲンについて思いを馳せていた。宿泊先のホテルから、ノルウェーを代表する大学の一つであるベルゲン大学は眼と鼻の先にあり、滞在中に一度足を運んだ。ベルゲン大学は小高い丘の上であり、そこからベルゲンの街と海を眺めた時の景色が、今もまだ脳裏に強く焼きついている。この大学で探究活動が続けることも悪くない。そのようなことを思ったのが懐かしい。

---

ノルウェーの大学は、留学生であっても基本的には授業料が無料であり、ベルゲン大学も例外ではない。つまり、生活費さえあれば、授業料を収めることなく、ベルゲン大学で学位を取得することができる。

科学哲学や美学を探究できる環境、そして作曲を学べる環境がベルゲン大学にはある。そうしたことだけではなく、ベルゲンという街自体の魅力を考えてみた時に、いつかベルゲン大学に在籍し、ベルゲンという街で生活を営んでみたいという静かな思いが顔を覗かせる。

いずれにせよ、今の私がなすべきことは、科学・哲学・音楽に関する知識と経験を積み重ねていくための実践活動に絶えず従事することであり、そうした最中であって、絶えずそれら三つの領域を包括する究極的な主題を明確なものにしていくことだ。その先に、いつかそれらの三つの領域を統合的かつ自由に探究する環境に自分が置かれ、実際にそれら三つの領域を包括的に探究し、この世界に形を残し続ける日が来るだろう。2017/9/15(金)

#### No.193: Executive Functions and Metacognition

Participating in today's lecture, I learned the similarities and differences between executive functions (EFs) and metacognition (MC). Both are top down mental processing that is controlled largely by the prefrontal cortex. Whereas procedural metacognition that is self-reflective and higher order cognitive processing to regulate ongoing cognitive processes entails "monitoring" as an explicit component, the role of monitoring is implicit in EFs; it has not studied directly.

Another difference is that EFs focus more on here and now phenomena, while MC tends to focus on much bigger pictures. In other words, the former can be regarded as microlevel mental processing, whereas the latter can be referred to as microlevel mental processing.

This is just a summary of these two terminologies. From here, I need to think about the implications for further research and educational practice. 11:10, Monday, 9/18/2017

---

## 1548. 直接的な師・間接的な師を求めて

早朝目覚める直前に、額の中心を閃光が貫いた。それは、少しばかり黄色がかっているかのような白い光だった。その光が、自分の額の中心を貫いたのを知覚した瞬間に目を覚ました。

昨夜は作曲実践をしている時にふと、正統な作曲教育を受けることなく作曲家として活動を続けた人物に思いを馳せていた。このテーマについて考えるとき、私の中でやはり真っ先に思い浮かぶのは、ロシアの作曲家アレクサンドル・ボロディンだ。ボロディンとの出会いについては以前に書き留めていたように、彼は私に大きな励ましをもたらす存在である。

化学者としての仕事においても大きな功績を残しながら、作曲家としても偉大な仕事を残していったボロディンは、私にとって大きな指針となる。ボロディンは、ロシアの作曲家ミリイ・バラキレフに出会うまでは作曲の正統的な教育を一度も受けたことはなかった。また、ボロディンが作曲を志した年齢は、私が作曲を志した年齢とほぼ同じであることも、私がボロディンに惹かれる理由の一つである。ボロディンがどのように作曲技術を磨いていったのかのプロセスに強い関心がある。

もっとも重要な点は、自分の内側に作曲への強い衝動があり、その衝動を形にするための指導者がいたということだろう。ボロディンにとってはバラキレフであり、ボロディンはバラキレフという師につきながら作品という具体的な形を生み出す過程の中で、作曲の技術を徐々に磨いていったのだろう。

今の私は、作曲を直接的に学べる師がいない。現代社会の技術的進歩によって、今はオンラインを通じて作曲を学ぶことができる環境があるが、やはり直接的に師と呼べる人物から教えを授かることは重要であるように思える。師の探索と選定は誰にとっても大きな課題だろう。私もこの課題に直面している。今の私が置かれている環境を考えると、ある作曲家に直接的に師事することは現実的ではない。そうなってくると、直接的な指導者がいないままに、いかに作曲技術を磨いていくかという課題に突き当たる。

師がいないことの問題点は、やはり技術の進展を確認し、その進展に応じた支援を得られないことだろう。その結果、結局技術が一向に向上しないことや技術がいびつな形で発達してしまうことが

---

起こりうる。こうした問題を回避しながら、いかに直接的な指導者なしに作曲技術を磨いていくかは、今の私が直面している大きな課題だ。

おそらく、いつか私は正式な形で作曲家に師事することになるかもしれない。しかし、そのいつかは不明確であり、それまでの期間において、いかに自らで作曲技術を磨いていくかを真剣に考えなければならない。直接的な指導者がいないのであれば、間接的な指導者を複数持つておくということは一つ有効な手段かもしれない。現在繰り返し視聴している、シンガポール国立大学の作曲講座の担当教授は、私にとって極めて大切な間接的な指導者だ。

さらには、作曲家が執筆した優れた作曲教本もまた間接的な指導者だと言える。そして、過去の偉大な作曲家の楽譜もまた間接的な指導者だと言えるだろう。そして、最後に取り上げた間接的な指導者は、もしかすると直接的な指導者以上に重要な事柄を伝えてくれるかもしれない。楽譜が訴えかけてくるものや伝えようとしているものを深く汲み取れるようになるためには、今後も継続して音楽理論を学習し、実際に楽譜を読み解く実践を継続させていく必要があるだろう。

さらには、作曲者自身がどのように生きたのかということを理解するための文献を読んでいくことも大切になるだろう。今はこのように、間接的な指導者から学べるだけのことを学ぶという姿勢を持ちたいと思う。

作曲実践に関して当面の自分がなすべきことは、現在履修している作曲講座の内容を完全に咀嚼し、それが自分の作曲実践の中に具現化させるほどまでに繰り返し視聴し、過去の偉大な作曲家が残した楽譜を読み解き、それを範にして自らの作曲実践を進めていくことだろう。2017/9/15(金)

#### No.194: Self-Regulated Learning

After the class, I have still pondering what I learned today. I can effortlessly enumerate key points in the lecture, but I need to prioritize a couple of points. First of all, I think I have to reconsider my self-regulated learning process. Self-regulated learning mainly consists of acquisition, retention, and retrieval of knowledge. As I reflected upon myself in the morning, I need to stop just acquiring knowledge without giving enough space to digest it. Furthermore, I should monitor

---

regularly the retention rate of my memory. Without self-evaluation, I would be lost in tons of undigested knowledge.

In sum, I suggest myself and others not to cram information without enough space. Also, I recommend to perform regular monitoring and self-evaluation of how much we can restore and retrieve the information that we learned. It can be a well-known fact, but we often forget it when we learn something. 11:40, 9/18/2017

#### 1549. 不毛な探究の停止へ向けて

夕方の時刻を迎えた。早朝の天気予報を裏切る形で、今日は夕方までは晴れ間が広がっていた。明日からまた天気が不安定になるようであるから、本日ランニングに出かけた方が良かったのかもしれない。しかし、今日はランニングに出かけなかった分、自分の仕事が進んだ。

相変わらず、毎日自分の関心事項に純粹に従う形で探究を進めているのであるが、常に自分の後ろには、「探究をする」という言葉を発することによって、探究と探究でないものを区別している自分に気づいている自分がある。すなわちここでは、探究などというものが本質的には存在しないものであり、探究すればするほどに、探究対象から離れていくことを自覚している自分があるのだ。これは「自己探究」と呼ばれるものに関しても等しく当てはまることだろう。

「自己を求めるということは、すでに自己を見つけているということなのだ。だからそこにくつろぐとよい」とパスカルは言う。自己など求められるものでも、得られるものでもない。自己はすでに今この瞬間に顕現している「それ」のことを指す。一度たりとも顕現していなかったことなどないこの自己を、私たちはどうやって見出すことなどできるだろうか。

常にすでにそれは見出されているものなのである。自己探究なるものを始めると、すぐにそうした試みに終わりが無いことに気づくだろう。自己など究極的には知りえないものであり、それはすでに究極的に今この瞬間に知りえているものなのだ。

---

私たちは、洗面所にある鏡を見習うべきだろう。鏡は一切努力しなくても鏡像を得る。なぜ私たちは、すでに得ている得られぬものを懸命に得ようとするのか。もうそれは、最初から完全に得ているものだということになぜ気が付かないのだろうか。いつまで不毛な探究を続けるのだろうか。

昨日、哲学者のジャン＝ジャック・ルソーが作曲家としても活動していたことを知った。ルソーが残した代表的な作品はオペラ曲だが、実際にそれらを聴いてみた時に、少々驚かされた。哲学的な仕事を残し、さらにはこのように優れた曲を残したことに驚かされたのである。ルソーを出発点として、私は自分に多大な影響を与えているアレクサンドル・ボロディンを経由し、米国のジョン・オールデン・カーペンターという作曲家に行き着いた。

カーペンターは、一時期エドワード・エルガーに師事して作曲を学んでいたが、本業は別にあったようだ。つまり、化学者であったボロディンと同様に、カーペンターも日曜作曲家として作曲を行っていたのである。

カーペンターが残したピアノ曲を聴いてみると、日曜作曲家であってもこのような作品を世に残すことができるのだと感銘を受けた。もちろん私は、偉大な作曲家と評される人物の作品に範を求め続けるだろうが、ボロディンやカーペンターといった、日曜作曲家と呼ばれる作曲家たちからも得るものが非常に多いと思っている。彼らの音楽から何をどのように学ぶかに関しては、また今晚の作曲実践を行う中でより具体的にしていこうと思う。2017/9/15(金)

#### No.195: Network Science and Educational Science

Since I started to explore complexity science a couple of years ago, I have also been intrigued by network science because both fields are relevant. Knowledge acquisition and knowledge construction are my recurrent themes that capture me very much. I have begun a small endeavor to bridge between network science and educational science.

I suppose that both knowledge acquisition and construction can be more closely examined by network science because the essential nature of knowledge building process is creating a dot of information—often a concept—and link it with the previous knowledge networks.

---

If I elaborated the process of knowledge construction, that would contribute to educational practice. To conduct empirical research on the network nature of knowledge construction, I need more advanced knowledge and skill of network science. 16:58, 9/18/2017

### 1550. この世界の神々との邂逅

フローニンゲン大学での二年目のプログラムの第一週が終わり、週末を迎えた。起床直後、いつもと同じ日課を終えてから書斎の机に着く。A4サイズで印刷をした年間カレンダーの一日を、また今日も一つ丸で囲む。

ここ数日間の風の強さとは打って変わって、早朝のフローニンゲンはとても穏やかだ。今は完全に無風状態であり、全てを打ち消す「雷鳴」のような静寂さを持っている。そんな静寂さの中に入れれば、どのような音もたちまちに聞こえてくるだろう。

昨夜、忘れることのできない夢を見た。夢の中で私は、山の景色が美しいある町にいた。私はその町から隣町に行く予定があり、二つの町をつなぐ山道を移動することにした。山道と言っても、それは整備の行き届いた国道であり、車が走ることのできる道である。

二車線のこの国道を、私は空を飛びながら移動していた。車よりも幾分高い位置を維持し、国道を取り巻く山々の自然を眺めながら、私は目的地である隣町に向かって飛んでいた。自分が空を飛んでいる車線を含め、対向車線にも何台かの車の姿が常に見える。中には私が空を飛ぶ速度よりも早い車があり、実際に私を後ろから追い越していく車があった。

山の景色が輝いているかのように見え、その景色に見とれていたためか、空を飛ぶ速度は比較的ゆっくりとしたものだった。しばらくすると、自分が空を飛ぶ高度が徐々に下がってきていることに気づいた。これでは後ろからやってくる車にぶつかってしまい、下手をすると対向車線を走る車にもぶつかってしまうかもしれないと思った。そこで私は、車線から離れ、道の左手で一度止まることにした。

すると、左手には広大な海が広がっていた。海は海でもそこには砂浜はなく、断崖越しに青々とした海が開かれていた。躊躇することなく、私はこの海の中に潜ることにした。

---

すると突然、シャボン玉のような球体が目の前に現れ、それが私の体全身を包んだ。どうやらそれは、空気が圧縮して作られたものであり、海の中に潜るために必要な存在のようだった。海に潜り、海底に到着すると、そこでほら穴のようなものを発見した。

海水で満たされたこのほら穴内はとても暗く、埃っぽい匂いが立ち込めている。ほら穴の高さはとても低く、人間がそこで立つことはできず、砂底を張って進むことしかできない。砂底を進むたびに、砂埃のようなものが海水の中で立ち上がり、それは地上の埃の匂いを彷彿とさせた。

砂埃が無い、それが収まるのを待っていると、近くに何かが徐々に姿を表すのが見えた。見るとそれは、石でできた彫像だった。しかも一体ではない、何体もの彫像が姿を現したのである。

最初私は、それらの彫像が墓石のように錯覚された。しかし近寄ってみると、それらは一体一体が個性を持つ石の彫像だったのだ。こんなところに彫像があるとは思ってもみなかったため、驚いていると、遠くの方で青く光るものが見えた。その光の方に視線をやった時、無数の彫像が砂底に立っていることに私は驚愕した。

このほら穴の高さの都合上、それらの彫像の大きさを比較的小さいのだが、私はその数に圧倒されてしまった。青い光の方へ進んでみると、それは一つの彫像の中心部から発せられている光だった。

この彫像は、仏のような姿をしていた。彫像から発せられる光に見とれていると、突然その彫像が私に微笑みかけてきた。その微笑みは、これまで見たことのないような平穏に満ちた笑顔であり、私は絵も言わぬ安堵感と幸福感に包まれた。その瞬間、私はこのほら穴にある彫像たちが、この世界の神々であることに気づいたのである。

青く光る仏の像から離れ、私はその場を静かに後にしようと思いついた。私が一体一体の彫像の横を通るたびに、それらの彫像が私に微笑みかけてきた。神々からの微笑みを受けながら、来た道に戻っていると、突然涙が溢れ出した。それは感動の涙だった。

微笑みかける一体の彫像の脇で、私は少しばかり立ち止まった。その彫像は、「それでいいのだ」「そのままであれ」と伝えるかのように、私に微笑みかけ続けていた。

---

人の形をした彫像、人の形ではなく文字が刻まれただけの石板のような彫像、それらのどちらからも私は大いなる祝福を受けていた。感動の涙が落ち着いたところで、私はこのほら穴から出た。

すると、私は先ほどいた町に戻っていた。この町に住む見知らぬ人が私の横に立っていて、突然この町に伝わる古い伝説を語り始めた。

**見知らぬ住人:**「この町にはですね、この世界の神々が祭られているんですよ。もちろん、それは単なる伝説でしょうがね」

私が見たのはその伝説だった。いや、それは単なる伝説ではなかった。

この世界にあまねく存在する神々との邂逅。その感動が今もなお私の内側にあり、それは単なる言い伝えではないのだと知る。2017/9/16(土)

### 【追記】

この夢を見たのは、今からもう一年以上も前のことである。だが、今もなおこの夢について鮮明に覚えている。海底の洞穴で見た、あの仏のような彫像の微笑みを忘れることができない。そして、無数の彫像たちに見守られ、その加護を受け続けているという感覚が、この夢から一年以上も経った今もなお自分の内側にあることが奇跡のように思えてくる。フローニンゲン:2018/12/24(月)15:13

### No.196: Keeping Track of My Desultory and Unassociative Thoughts

As usual, my desultory and unassociative thoughts naturally show up.

What if I write down everything that is flowing in my mind? Of course, it is unrealistic and unfeasible to write down everything, but keeping track of my intermittent thoughts is captivating to me in that it enables me to discover hidden connections and patterns underneath my thoughts.

Since learning is the process of creating a dot of knowledge and connect it with the already-established dots. Writing is one of the effective methods to create a dot and link it with previously constructed knowledge. Whenever something captivates me, I will always write it down

---

---

however fragmented it looks and sounds. That is an optimal way for me to create a new dot and incorporate it into my previous knowledge networks. 16:05, Monday, 9/18/2017

### 1551. 探究サイクル

昨日から暖房をつけ始め、就寝時には湯たんぽを使うようになった。まだ九月半ばだというのに。

今朝も足元が冷えるため、暖房をつけることにした。今日は土曜日であるが、普段と一切変わらずに学術研究と作曲実践を行っていこうと思う。まずは午前中に、「評価研究の理論と手法」のコースの後半で取り上げられている“Experimental and Quasi-Experimental Designs for Generalized Causal Inference (2002)”の二読目を進めていきたい。

月曜日は、このコースの二回目のクラスがあるが、今日読み進める箇所は第五回目と第六回目のクラスで取り上げられる箇所だ。このコースが自分の研究や実務にもたらす意義を考えた場合、このテキストに記載されている内容を是非とも深く理解したいと思う。しかし、このテキストは簡単に消化できるようなものではなく、そのため、何度も繰り返し読む必要がある。今、このテキストを再読しているのもそのためだ。

実際のクラスが始まる前に二読目を終えておき、クラスの前日に簡単に三読目を行う。そして、クラスから自宅に戻ってきた後に、要点とキーワードの確認を兼ねて、簡単に四読目を行うということを心がけている。それぐらい繰り返し学習しなければ、学習内容が真に我がものになることはない。その他にも心がけていることは、とにかく知識を無理に詰め込もうとしないことだ。

以前の私であれば、このような分厚いテキストでさえも一日で読もうとし、そのテキストを読み終わったらすぐに次のテキストに移るということをしてきた。実はこれはかなり問題のある学習方法である。

知識が自己の深層に浸透していくような時間的余裕を与えることがとても大切である。つまり、次から次に新たな知識を取り入れようとするのではなく、何らかの知識項目を取り入れたら、その上にまた新しい知識項目を覆い被せるのではなく、あえて余白を作るのである。一冊のテキストを読んだら、次のテキストに移るのではなく、短くてもいいので少し休憩を取り、自分の考えなりを言葉としてまと

---

めていくのである。また、テキストの全てを一気に読もうとするのではなく、あえて分けて読むということも大事になるだろう。

今の私が採用しているのもこの方法だ。テキストの数章を読み終えたら、そこで一旦休憩を挟む。それまでのところで湧き上がった自分の考えなどを書き出したり、立ち上がって少し体を動かすなどの休憩を挟む。読むことと書くこと、そして短い休憩が何度も続くサイクルの中で日々の探究が行われていく。今日もそのような形で探究が進んでいこう。

今日は上述したテキストの中の三つの章を読み、久しぶりに和書を読みたいと思う。そうした読書の合間合間に、文章を執筆することがあり、短めの作曲実践がある。明日は日曜日であるため、月曜日のクラスで取り上げられるテキストと論文の三読目を行ったら、後は和書を読んだり、作曲実践を行うなど、ゆったりとした休日を過ごしたいと思う。2017/9/16(土)

#### No.197: Existentiality in Writings

I can recently see myself in my writings. Some people might argue that it is obvious because I am the author. Yet, the story is not so simple.

I am pointing out here the extent of embodiment of the author in his or her writings. Over several years, I have struggled with this issue even when I write in Japanese. In a word, the issue is the absence of an author in writings. "Authoring" is not just writing objective phenomena but inscribing own existentially.

I will never write in the way that I cannot see myself in my writings. My writings should always reflect my existentiality and uniqueness. 16:17, Monday, 9/18/2017

#### 1552. 意義喪失と意義再燃

今年のフローニンゲンにおいて夏を感じることはほとんどできず、気付けば秋がやってきた。今日も天候が優れず、晴れ間が一瞬広がった昼食前に、数日分の食料を買いに近くのスーパーに出かけた。天候は優れないが、自分の探究活動は順調に進んでいる。今日も午前中に、予定していた専門書を読み、それは二回読んだだけではほとんど理解できないが、初読の時よりも若干理解が

---

進んでいることを実感した。書籍を一読や二読程度で済ませてしまう消費的読書ではなく、繰り返し上塗りするような形で何回も読むことをしなければ、書籍に記載されている事柄を深く理解することなどできない。

とりわけ午前中に読んでいた書籍が専門的な内容であり、なおかつ、記載内容が実際に研究の中で活用してみなければ理解しづらいものであるがゆえに、数回程度読んだだけでは、知識を身体感覚まで落とし込んでいくことができない。幸運にも、このテキストを取り上げているコースでは、テキストの内容に紐付いた課題がこれから毎週出題されるため、手を動かしながら課題に取り組むことによって、徐々に記載内容が身体の次元にまで浸透していこう。

書籍の記載内容を頭で理解する次元にとどめてしまうことは、もう止めにしなければならない。少なくとも身体感覚の次元で知識を捉え、それを身体を通じて活用できるところにまで理解を深めていかなければならない。実際に研究や実務の中で活用できない次元で知識と向き合うことを早急に止めにする必要があるだろう。また、自分の深層的な存在に響かないような知識項目とは、そもそも接触することさえ避けなければならないだろう。そのような知識項目を追いかけていては、存在に不要なものが固着するだけであり、見るべきものが見えなくなるだけである。

午後においても、引き続き同じ専門書を読んでいった。ここ数日間、自分の認識上の問題と相まって、科学研究の意義を一旦見失っていた。だが、今日改めてもう一度、自分の中で科学を通じてなすべき仕事があるということに気づいた。稚拙な表現かもしれないが、この世界のより多くの人により良い教育を届けるという想いを根幹に据え、その実現に向けて科学的な研究を進めたいという意欲が再燃したのである。

この現代社会は、数え切れないほどの問題を抱えており、蔓延する閉塞感に時に押しつぶされそうになることがある。現代社会の問題を改善していくためには、多様な領域間の共同作業が不可欠とされているが、その中であって、教育が果たす役割はやはり依然として大きように思える。経済にせよ、政治にせよ、医療にせよ、それらの根幹には教育が横たわっている気がしてならない。教育哲学者のジョン・デューイが指摘するように、教育はあらゆる分野に触れるものなのだ。

---

さらには、教育の本来の目的の一つは人間の解放にあり、その逆を行く現代社会の動きに対して待ったをかけられる可能性があるのが教育のような気がしてならないのである。子供の教育も成人の教育も含めて、教育に対して科学的かつ哲学的な形で関与し、教育の本来の目的を回復させながら、社会問題の改善と人間回復に向けた試みをなしていきたい。

科学研究の意義が自分の内側で再燃し、何か使命感のようなものすら感じる。フローニンゲンの天気のように閉塞的な感覚を科学研究に対して抱く日々が少し続いていたが、「教育」という存在が再度私を立ち上がらせてくれた。もう二度と、教育という存在から離れたくはないと思う。2017/9/16 (土)

#### No.198: Insanity

I sometimes find my lunatic aspects. The most representative one is writing.

I cannot live my life without giving a form of my thoughts and feelings through writing. They are always waiting for appearing out of my inside world.

I cannot be satisfied with just writing in Japanese; that is insufficient to articulate my existential issues. At the same time, writing in English is also deficient in fully formalizing my issues. That is why I sought for music composition as an alternative apparatus to inspire my thoughts and feelings. Writing and composing music are vital practice to continue my daily life in a profound way. 16:48, Monday, 9/18/2017

#### 1553. 不毛な試みに邁進する現代人

自己を求める人。自己を探そうとする人。それらはどちらも本質的に何かを見誤っているようである。

昨夜就寝前に、「自己の基底」に触れる体験にまたしても見舞われた。この体験についてはこれまで何度も書き留めているから、あえてここで繰り返して説明することをしない。この体験の本質は次のようなものである。自己が「見つけた！」と叫んだ瞬間に、自己の基底が「それではまた」という挨拶すら残さぬまますぐに消え去るということだ。

---

仮に自己が自己の基底と合一した状態を維持していると、自己は自己の基底に安らぐことができる。自己が自らの身体でもなく、感情でもなく、思考ですらなく、それらを目撃する者ですらないという意識。それらを目撃する者が広大な気づきの意識の中に溶け込み、全てから薄皮一枚完全に離れ、それでいて全てと一心同体であるという感覚の中に私はいた。この体験それ自体、あるいは自己の基底はいつも極めて狡猾だ。

いや、自己の基底が狡猾なのではなく、単に自己が愚鈍すぎるのかもしれない。つまり、自己が自己の基底を見つけたと気づくとき、「ああ、自己の基底はこれだったのか」と一瞬でも自らの思考を挟むとき、自己の基底は一瞬にして姿を消す。その理由は簡単である。なぜなら、自己の基底は見つけられるようなものではなく、最初から、しかも常にそこにあるものなのだ。

「ある」という言い方ですらおかしいかもしれない。なぜなら、私たちは常に、この基底意識と寸分違わず、日々の瞬間瞬間を生きているからだ。私たちは、一度たりともそれと離れたことはなかったのだ。一度も離れたことのないものを求めるというのは、馬鹿げなことではないだろうか。

やはりそう思うだろうか。私もそう思う。

だが、現代社会の中で自己を求める人や自己を探そうとする人は、全員がこの馬鹿げた行為に邁進していると言える。求めようとして見出される自己や探そうとして探し出される自己は、全て偽りである。どれもがこの現代社会のイデオロギーに塗り固められた虚飾の自己である。本質的な自己は、基底意識に他ならず、それは全てから解放されていて、それでいて全てと同一だ。また、それは一度たりとも私たちから離れたことはない。常にそこにあるものを見つけようとするのがどれだけ馬鹿げたことかについては、もう少し説明をしなければならぬかもしれない。

昨夜の私もこの過ちを犯した。というよりも、この基底意識に出会った時にはいつも、そこでくつろぐことをせず、どうもそれを見つけたと頭の中で叫んでしまうのだ。その叫びを発した瞬間に終わりである。なぜなら、それは見つけられるものではないからであり、気づかれるものではないからだ。それは「見つける・見つられる」「気づく・気づかれる」という二元論的な性質を超越している。伝統的には、この現象は「非二元」と呼ばれるらしい。素晴らしい名である。

---

この非二元の意識は、見つけることや見つけられるという二元論的な事柄を完全に超越している。そして、ひとたびそれを見つけたと思った瞬間には、それは別れの挨拶をしないままにどこかに行ってしまう。昨夜の私は、そのような性質を持つ体験をした。厳密には、それは体験ですらないのだが。

ある人:「すみません。あの門を通り抜けるにはどうしたらいいのですか？」

別の人:「えっ、あの門？あの門なら最初から開いてますけど」

人々は、最初から完全に開いている門を見て、それを何とか開けようとする。開いている門を開けるにはどうしたらいいのだろうか？結論は簡単であり、そのようなことは不可能だ、ということである。要するに、自己を求める人や自己を探そうとする人は、最初から不可能な試みに乗り出そうとしているのだ。

自分の眼が、眼がどこにあるのか探し回る姿は、とても滑稽ではないだろうか。まさに人々は、この滑稽なことに真剣に従事しているのだ。だが、それは滑稽さでは済まされない。そのようなことに従事して見出される自己は、完全に偽りのものであり、最悪の事態は、私たちがその虚飾に塗られた自己に固着してしまうことである。そこには解放も自由もない。

私たちは、最初から常にあるものを求めようとし、逆にそれからどんどんと離れていく。この不毛な試みは、自己を苦しめ、解放や自由どころではなく、自己に制約を上塗りしていく。人々は一体何を見ているのか。見ているのは幻影であり、自分の眼が確かにそこにあるということに一刻も早く気づくべきではないだろうか。2017/9/17(日)

#### No.199: Domain Specificity in Writing

It seems that something within me is still kindling. It is strenuous to relax the inner flame. In this state of consciousness, I am not writing. Instead, “my writing is writing me,” which sounds uncanny. In other words, in the present state of my consciousness, I am dissolved into the autopoeitic flow to continuously generate itself.

---

There is no subject to write here, but there exists only writing at this moment. Writing refers to itself and regenerates itself to create something new. I am in that process; or I am the process.

I was think about the domain specificity of writing. I had never engaged in personal writing in English in the last five years. This is my sixth year to live outside Japan, and I have currently kept a diary in English everyday.

Since personal writings and academic writings are distinct, I can notice how differently both writing styles affect my thoughts and feelings. I do not articulate the difference here, but it seems to stimulate different domains of my brain and mind because each writing has an interdependent disparate territory. 17:18, Monday, 9/18/2017

#### 1554. 回るコマとそれを支える存在

今日は早朝から、何だかとても活力に満ち溢れている。フローニンゲンの寒さなど物ともしない熱情が自分を包む。

炎に炎を注ぐことなどできない。これはすでに完全であり、いつも常に私の中に絶えずあるものだ。ただ、私がこの完全な炎に気づけないことが時にあるだけなのだ。

早朝の起床時に最も驚いたのは、今日がまた始まったということだった。始まったのは昨日でも明日でもなく、今日だということへの純粹な驚き。自分は昨日に生きたことはなく、明日に生きたこともない。昨日を思い出し、明日に思いを巡らせることはできても、昨日を思い出す自己と明日に思いを馳せる自己は、今日の自分に他ならない。いつまで経っても今日の連続。

今朝目覚めた時、目覚めに気づいたのは、昨日の自己でも明日の自己でもなく、今日の自己だった。早朝から笑いが込み上げてきた。それは、自分がいついかなる時も、常に今日に生きているということへのシンプルな事実に対する笑いだった。

昨日も、いつもと同様に、その日があつという間に過ぎ去ったように感じられた。確かに、私はその日において、自分のなすべき仕事に絶えず従事していたから、時間があつという間に過ぎ去つたと

---

いうのも納得がいく。だが、私は徐々に、この「絶えず何かに従事する自己」とは異なる自己を自分の中に見出しつつある。それは絶えず何かに従事する最中であって、何にも従事しない者である。私が日々、自分の仕事に安心して没入することができるのは、この何にも従事しない者の存在のおかげかもしれない。

最初私は、日々の生活の中で絶えず仕事に従事する自分をコマに喩え、何にも従事しない者をコマの軸に喩えた。確かに、日々何かに従事する私の姿は、回り続けるコマに似ており、何にも従事することなく、何かに従事する私を見守る者はコマの軸のように思えた。しかし、後者の存在は、コマの軸ですらなく、もしかすると、コマの軸が立つための地面、もしくはコマと軸を取り巻く諸々の力の総体なのではないかと考えを改めた。

今朝はいつもより早めにコーヒーを入れた。今日は日曜日であるから、少し前に立てた誓いを守ってみたい。それは自分を探究に駆り立てる衝動を緩め、少しばかり探究から離れるというものである。もちろん、今日という日において何もしないということではない。そこまで離れることは今の私にはできず、そうしたことが可能な成熟の境地には至っていない。

書物から何かを得ようとするような一見純粋な動機や、思いついた思考や感覚を書き留めようとする一見純粋な動機を振るいかけ、最後に残った動機だけに従って行動するような一日にしたいのだ。それはもしかすると、普段と変わらず専門書や論文を読むことかもしれないし、文章を執筆することかもしれない。あるいは作曲をすることかもしれない。

いずれであったとしても、純粋な動機がさらに振るいかけられ、最も純粋な必然動機を基にした行為であるかどうか重要なのだ。そうした行為をなすためには、何はともあれ、探究衝動を緩め、それと一定の距離を取ることが求められる。

コーヒーメーカーが音を鳴らし、彼の仕事が終わったことを告げる。今日は早朝からゆっくりとコーヒーを飲みながら、くつろぎの中で仕事を進めていきたいと思う。2017/9/17(日)

#### No.200: Transparent Volition

Transparency is penetrating my will.

---

The dream I had last night symbolized the lucidity that floods into my volition. We often conceive of our future dream—what we want to do or what we want to become. However, that is not a real dream. Our real dream cannot be seen because it is nothing but our luminous will.

If we fail to realize the essence of our real dream, we will continue to deplore or complain that our dream does not come true yet.

Our real dream always already comes true when we notice that it is nothing else but our transparent volition. 07:06, Tuesday, 9/19/2017

### 1555. 燃焼と静けさ

遠方の空に白く輝く雲が見える。その他の雲は、灰色というよりもむしろ、薄い青色を発しながら空全体を覆いつている。

天気予報では午後から雨とのことであつたが、夕方を迎えた今において、まだ雨が降っていない。幸いにも、来週の半ばからは天気が回復し、晴れの日が続くようである。

二ヶ月半に及ぶ夏季休暇を挟み、欧米での生活の五年目を終える頃、自分の内側に激流のような激しさと同時に、激流のそばに存在する静かな岸の両側面を見て取ることができるようになった。自分はそれらの一方ではなく、両者である。いや、むしろ私の存在は、激流と岸を含んだ背景全体だと言った方が正確かもしれない。いずれにせよ、自己を形成する背景の中に、全てを溶解する激しい流れと、全てを抱擁する静けさが存在していることは間違い無いだろう。

巨大な燃焼に際して、極度な緊張を伴う静けさが訪れる、というリルケの主張は重く私に響く。

欧米での五年目の生活の中で、私は確かに巨大な燃焼を経験した。だが、それは決して終わることの無い燃焼であり、燃焼過程は今もなお続いている。一人の人間が真にその人間性に目覚め、それを自覚しながら自らの生を全うしようとするとき、私たちは誰も巨大な燃焼を経験することになるのではないだろうか。そうした燃焼に伴って、いつからか、私はこれ以上ないほどの静けさに包まれるような体験を度々してきた。

---

全てを抱擁する絶対的な静けさ。それは全てを打ち消す雷鳴のような静けさであり、激流の音だけが鳴り響く、激しい流れがもたらすあの静けさだ。

書斎の中に、ベートーヴェンのピアノソナタが静かに鳴り響く。作曲実践を始めて以降、曲と向き合う姿勢の変化に加え、単純に音楽を理解する観点が増えたことにより、音楽生活がより豊かなものになっていることを実感する。

音楽理論を学ぶことは、徹頭徹尾、自らで曲を生み出すためだけにあると位置付けていたが、音楽鑑賞をより豊かなものにしてくれることは嬉しい副産物である。今聴こえているベートーヴェンのピアノソナタの中に、どれだけ深い思想と技術的卓越性が内包されているか、自分は本当にわかっているだろうか。

この曲に込められたベートーヴェンの思想の深さは絶望的なまでに深く、技術的卓越性の高さは絶望的なまでに高い。それをわかった上で、こうした偉大な作曲家の作品と向き合うことが自分には求められる。

曲を生み出す過程の中で、私はこれから何度もベートーヴェンの曲に範を求めるだろう。その時に、表面的な分析という遊戯ではなく、深く作品世界を理解するという意思を持ちたいと思う。でなければ、最初から分析などするべきではなく、ベートーヴェンに範を求めることなど最初からしてはならないことだと思う。

数ヶ月前まで音符すら読めなかった私が、いつの間にか毎日作曲実践に取り組むようになった。そして、気がつけば、曲を創出するための楽譜研究用に購入した楽譜が、書斎の中で小さな山をなしている。これまで購入した楽譜は、バッハのピアノ曲集、モーツァルトのピアノソナタ全集、クレメンティのピアノソナタ及びソナチネ集、ベートーヴェンのピアノソナタ全集、シューベルトのピアノソナタ全集、グリーグの叙情曲全集に及ぶ。

これまで購入した全集の作曲家は全て男性であるが、最近は女性の作曲家の仕事も参考にしたいと考えるようになっていく。過去の偉大な女性作曲家といえば、すぐに私の中で思い浮かぶのはフアンニ・メンデルスゾーンやクララ・シューマンである。当然、彼女たちが残した作品をこれまで何度も聴いてきたが、先日偶然ながらセシル・シャミナードというフランスの作曲家の存在を知った。シャミ

---

ナードの残したピアノ曲には、今の私には言葉にできない魅力を感じている。2017/9/17  
(日)

### No.201: Meanings and Connections in Knowledge Acquisition

Making meanings and connections is key for acquiring new knowledge. Cramming information does not work in learning if we want to construct solid knowledge networks.

The more we build robust knowledge networks, the less we use our working memory, which enables us to apply knowledge more efficiently and effectively.

I am reflecting upon my knowledge building process today. How much did I pay heed to making meanings for learning materials and to connecting the new knowledge with my previous knowledge networks? 19:41, Tuesday, 9/19/2017

### 1556. 自己、即、道:道、即、自己

—我らの行為は、我らを追う—ポール・ブルジェ

日曜日も終わりに差し掛かり、明日からまた新たな週が始まる。先ほど夕食を摂りながら、改めて自分の日々の取り組みが一体何であるかを明確なものにしようとしていた。やはり、私の日々の取り組みは、人間発達に関する科学的・哲学的・音楽的な探究を行い、探究の成果を現代社会との接点の中で形として表現していくことなのだ。そこから一瞬も離れることはできないし、離れたくはないという強い思いがある。

私は長らく、そうした探究に従事するための環境から蚊帳の外に置かれていた。今、欧米での生活の六年目を迎えるにあたって、ようやくそうした環境の中に自己を置くことができるようになった。それは実際にこの世界にある物理的な環境であり、同時に心理的な環境でもある。この六年間、いや、これまでの人生全ては、そうした環境に自分の身を置くために必要な時間だったのだと思う。感傷的ではなく、冷静にこれまでの自分の歩みを振り返ってみた時、その歩みが一見すると無駄なように思えても、それらは一つとして無駄なものではなかったのだ。

---

今から七年前、まだ私が企業に勤めていた時、私には、人間発達に関する科学的・哲学的・音楽的な探究を行い、探究の成果を現代社会との接点の中で形として表現していくことの基盤などなかった。それでも、それまでの人生の一步一步の歩みが私にとっては必要だった。そこから現在にかけて、満足のいく探究すら許させれない環境に置かれた時期を過ごすこともあり、そうした最中にあっても、ごく僅かでも基盤を構築していくための小さな一歩を毎日前に進めていた。

七年前の決断の日から今日にかけて、いろいろなことがあった。しかし、それらは今の自分を形作るために不可欠のものだった。七年前の自分もその時の今の自分であり、今日の自分も今の自分だ。

現在取り組んでいる事柄は、最後の日の最後の瞬間まで自分が呼吸を続けるのと同じように、人生の最後を迎えるその瞬間まで継続したいと切に願う。自己の本源に立ち還り、自己の本源から生きる道をようやく見つけたのだ。

私には名前があるが、私という自己の本質には名前がない。自己の本源から生きるその道は、私の本質と同様に名前がない。私という一人の人間が通ったということだけがその道に刻まれる道であり、私がこの世界でなす行為を追う道だと言える。私たちの行為が私たちを追うというのは、一つにはそのような意味があるように思える。

私たちが自己の本源に立ち還り、自己の本源から真に毎日を生きる行為が、一つの大きな道となり、それが私たちを足元から支えるのである。道は追いかけるものではなく、私たちの足元に常にあるものなのではないだろうか。

道に入ることも、道を追い求めることもできない。私たちは一度たりとも自分の道から離れたことなどなかったのだ。自己は即、道であり、道は即、自己なのだ。2017/9/17

#### No.202: Music Theory and Ear Training

I finished reading “Alfred’s Essentials of Music Theory.” This textbook covers essential topics of music theory. By virtue of this book, I could solidify the fundamental knowledge of music theory. Building rudimentary knowledge is key for knowledge acquisition. This cardinal principle is true to

---

learning music theory. As I have gradually constructed my knowledge, I have slowly been able to apply it to music composition.

Our learning process is inherently slow, and it should be slow-going.

This book includes two CDs for ear training that is beneficial not only to deepen my understandings of music theory but also to compose music. When I start to read it again before long, I will make full use of the CDs to enhance my listening skills for music composition. 19:53, Tuesday, 9/19/2017

### 1557. 余白の重要性と「銀行型教育」の弊害

今朝は六時を少し過ぎた時間に目覚めた。フローニンゲン大学で過ごす二年目のプログラムの第二週が始まりを告げた。

起床直後のダークブルーの空も、シャワーを浴び終えた頃にはライトブルーの空に変わりつつあった。そのおかげもあってか、目の前を通り過ぎる黒い鳥たちの姿がよく見える。

今日も、自分の内側の燃焼過程に忠実となる、活動的な日になるだろう。一昨日と同様に、昨日も夢を見ていたのだが、どうも印象が薄い。無意識の世界が不気味な落ち着きを放っている。ただし、昨夜の夢に関して一つだけ印象に残っているのは、夢の中で川端康成と三島由紀夫が現れたことだ。

厳密には、私が二人の視点に交互に立ち、何やら会話を行うというものだった。しばらく二人の役回りで会話をしていると、突然三島氏が消えた。それは一時的な意味で消えたのではなく、永遠の意味で消えたのだ。そこで、川端氏が一言つぶやいた。

「非常に残念な死に方をしたものです」

前後の文脈はもはや覚えていない。川端氏が漏らしたその一言が何度も私の頭の中に響き渡る。そのような夢を見たのが昨夜だった。

---

昨日について改めて振り返ってみると、自分の内側に余白を作りながら探究を進めていくことの大切さを実感した。探究に絶えず従事していたとしても、探究内容を自分の内側に詰め込んではいならない。それは早晩消化不良を起こし、探究の速度も質も落とすことになるだろう。とにかく内側に余白を維持したまま、徐々に咀嚼されていく探究項目が育っていく空間を与えることが重要である。

昨日はとりわけそうした意識を強く持っていたため、自分の内側にいつも以上に余裕があり、それでいて探究項目が身になっていく確かな感覚があった。教育哲学者のパウロ・フレイレが指摘しているように、知識を単に詰め込む「銀行型教育」を自らに施してはならない。

自分の身に浸透するような形で少しずつ知識項目と向き合っていくのだ。次から次に知識項目に飛び移っていくのではない。そうした知識の詰め込みは、遅かれ早かれ破綻をきたす。新たに入ってくる知識が、既存の知識と結びつくような形で、これまでに構築した知識体系と関連付けながら、新たな知識項目と向き合っていくことが重要になるだろう。

昨日、意識的に普段よりも探究速度を緩め、一つ一つの知識項目と余裕を持って接していると、知識体系のネットワークがむしろ活発に関係を結び合っているのがわかった。もしかすると、新たな知識を内側に取り入れた時、そこに移動を許す十分な余白があれば、その知識は自由に動き回り、既存の知識体系のネットワークのどこに自分が結びつけばいいのかを自発的かつ活動的に探ることができるのではないかと思う。

いずれにせよ、昨日の体験からは学ぶべきことが多くあり、今日からも内側に余白を作りながら、焦ることなく、そして無駄に知識を詰め込むことなく自らの探究に従事したいと思う。2017/9/18(月)  
06:44

#### No.203: Affection for Writing

Looking back what I have done today, I just kept writing and writing. Particularly, I wrote for an assignment of the course that I am currently taking. Scientific writings are inevitably distinct from personal reflective writings. However, my inner rhythm in the process of writing is almost the same in both writing styles. As I mentioned before, I am being captivated by the constructive

---

nature of writing. Since human beings are constructive creatures, my affection for writing is innate and normal. 20:06, Tuesday, 9/19/2017

### 1558. 学習理論と教授法の重要性

起床直後に執筆していた日記について再度考えを巡らせてみたところ、やはり現在学んでいる学習理論は、他者の成長支援の実践に有益なだけでなく、自らの探究活動そのものに直接影響を与えるものだった。

知識を詰め込むのではなく、余白を作りながら探究を進めていくというのは、当たり前と言えば当たり前なのだが、大量消費型の現代社会の風潮にさらされ続けていると、こうした当たり前のことがわからなくなってしまうような感覚の麻痺に陥りがちである。また、探究活動が日々の重要な仕事の一つである私にとって、余白を作りながら絶えず探究活動に従事するというのは口で言うほど簡単なことではない。少しでもボタンを掛け違えると、ついつい誤った形の過剰労働を自らに課すことになってしまう。

現代社会の風潮と人々の学びの姿勢、より広義には教育のあり方はやはり密接に関わっている。その点を考慮に入れると、私にとって重要なのは、絶えず現代社会の風潮を肌感覚で捉え、誤った形の学びや教育に人々が従事していないかをつぶさに検証していくことだろう。そして、社会的な問題に焦点を当てるのと同時に、個人としての私自身の学びや教育にも焦点を当てていく。社会と私を遊離させることは間違っており、私もこの社会の中で学び続ける一人の当事者なのだ。

現代社会で生きる一人の当事者の視点を常に持つことは至極当たり前だが、この点を忘れてはならない。当事者意識の欠落した個からの出発は単なる主観的探究の域を出ないが、当事者意識を持った個からの出発は主観的探究を超えていく。

探究は、徹頭徹尾、当事者意識を持った個から主観的になされるべきであり、それが深まりの極致を見せる時、普遍性という真の客観性に至る。そこに至らない客観性は全て排斥するべきであり、当事者意識の欠落した主観性も等しく排斥するべきだ。

---

今日はこれから二つの講義を受けに行く。一つは「学習理論と教授法」という講義であり、もう一つは「評価研究の理論と手法」という講義である。前者の講義に関しては、前述のように、自分自身の学習方法を検証し直すことに非常に有益である。

人は一生涯学び続ける生き物だが、実は学ぶことの方法論が欠落した状態で学びを行っている人が意外と多いのではないかと思う。もちろん、自分もその一人だろう。学ぶ手順とその方法を見誤ると、私たちの学びは思っているほど深まっていけない。むしろ下手をすると、全く学びが深まらないということも起こりうる。私自身、これまでもがきながら手探りで様々な学習方法を実践してきたが、ここで一度、学習理論と教授法を体系的に学ぶ機会を得ることができて非常に幸運だ。

このコースでは様々な論文が取り上げられるが、それらの内容を詰め込む形で読むのではなく、上述のように、自分の内側に余白を維持しながら一つ一つの知識項目と向き合うようにしていく。

欧米での六年目の生活は、これまでの探究姿勢を根本から見直し、常に余白を自分の内側に作りながら絶えず探究活動に従事することを心がけていく。2017/9/18(月)07:45

#### No.204: Knowledge Systems and Writing

Building robust knowledge systems and writing share a commonality, which is constructiveness.

Yesterday, I wrote a certain amount of writings for an assignment that is required in a course.

While writing my answers for questions in the assignment, I realized that writing was an essential component for learning. Although I have frequently noticed it, I believe that writing facilitates the process of knowledge construction.

One of the cardinal principles of any developmental processes is that our development occurs by deconstruction and reconstruction—or differentiation and integration. I think that writing inherently encompasses both aspects. As usual, I will differentiate what I learned from new knowledge and integrate it into my previous knowledge networks by writing today. 07:56, Wednesday, 9/20/2017

今日は午前「学習理論と教授法」の講義と午後「評価研究の理論と手法」の講義に参加した。どちらの講義も毎回自分にとって実りが多く、それらの講義に関してどこから何を書き留めておこうかいつも迷う。

記述の初期値設定問題については、実は偶然ながら今日の昼にも考えていたテーマであり、なぜ自分がある書き出しをその瞬間に選んでいるのかとても不思議に思うことがよくある。そこには当然ながら、自覚的な意図を伴うことがしばしばだが、その自覚的な意図が働く前の無意識的な創造プロセスにとっても関心がある。この問題は今のところ、問題の輪郭すらも明瞭にすることができていないので、この問題へ取り掛かることは極めて難しい。だが、書き出しという記述の初期値がどのようなものであるかは、記述の最終地点がどのようなものになるかを決定づけるものであるため、この問題は非常に興味深い。

今朝方、講義に参加する前に自宅で考えていたことが、そっくりそのまま今日の講義で取り扱われた。一つには、学習プロセスの中に、いかに余白を設けるかというテーマだ。「銀行型学習」のように、知識を休みなく詰め込もうとすることには大きな問題があり、知識を咀嚼するのに十分な時間的・精神的な余地を与えながら学習を進めていくことは、堅牢な知識体系を構築する上で鍵となる。

本日の講義を通じて、もう一つ考えていたことは、自分の学習プロセスの再検証の必要性だった。これはおそらく、私だけに当てはまることではなく、多くの人に当てはまる事柄なのではないかと思う。身も蓋もない言い方をしまえば、私たちはあまりにも無意味な学習に従事しているということである。言い換えると、学習項目を真に我が物にし、知識体系を深め、認識世界を豊かにすることはかけ離れた形で、私たちは日々の学習行為に従事しているのではないかということだ。

学習項目を自己に体現化させるためには、少なくとも三つの事柄に注意をしなければならない——観点を換え、次元を上げ下げすれば、注意しなければならない事柄が無数にあることに気づくが。一つは、自分が何を食べているのかわからないものを食べすぎだという問題だ。端的に言えば、自分の言葉で説明できないような膨大な知識項目に単に晒されすぎだということだ。

---

そこには、能動的にその知識項目を咀嚼しようとするような意思はなく、ましてやそれを自分の言葉で説明する実践などもなく、膨大な知識項目に対して受動的に接している態度が顕在化する。このような態度は、知識を自己の内側に体現化させることとは対極にあるものだ。自分自身でその知識項目を説明したり、自分のこれまでの知識と経験に引きつける形で文章を書くなりするという、知識への能動的な向き合い方の次に重要になるのは、上述したように、学習プロセスの中に余白を設けることである。

思うに、多くの人は、全く余白がないか、余白しかない間延びした学習空間が自分の内側に生起しているのではないかと思う。どちらも極端であり、それらは共に、知識を体現化させる上では不適切だ。

自分自身の学習空間を眺めてみると、そこには極度に余白のない世界が広がっていることに気づかされたため、最近は特に意識的に余白を設けることを心がけている。新たな知識が自己の深層に浸透していく時間的猶予と、深層に到達してから咀嚼運動が始まるまでの時間的猶予を少なくとも設けなくてはならない。そうした余白を設けて初めて、新たな知識項目が既存の知識のネットワークと活発に結びつき始めるのだと思う。容易に想像できるが、次から次へと上から知識項目が降りてくると、最初の知識項目は後から押し寄せてくる知識項目によって、咀嚼運動と自由な探索運動を妨げられてしまうだろう。

三つ目として重要になるのは、知識への能動的な向き合い方と余白の設定に関するモニタリングと、実際に知識項目がどれだけ定着しているのかを自己評価することだ。この最後のプロセスは、自分でも蔑ろにしがちである。というのも、ここでは知識の性質を深く理解していることが求められ、さらには、自己の無能さと向き合う必要があるからだ。

そもそも、一つの知識が点として自己の内側に確立されることすらも難しい。しかも、そのプロセスの中には停滞や退行が付きものだ。また、一つの点としての知識は、繰り返しの実践によって、徐々に時間をかけながら確立されていく。この点に関する単純な理解が欠けている場合、自分の知識の定着度合いを評価すると、しばしば自己の無能さに直面するだろう。知識が緩やかにしか構築されていかないというのは、実際には無能さによるのではなく、知識の構築プロセスが内在的に持つ不可避な特徴による。その点を押さえておかなければ、自己の無能さに不必要に苦しめられ、知識

---

の習得状況を適切にモニタリングすることができず、その都度その都度に打つべき打ち手を打つことができなくなるだろう。

今後は、少なくとも上記の三つの点を特に意識することによって、自分の知識構築プロセスの進捗度合いを観察しようと思う。2017/9/18(月)18:24

### No.205: Burnout Problem

Burnout has been a social issue in many countries. I had heard of the terminology when I was in Japan, but I had never seen people around me who suffer from the problem. However, I have already seen two persons in the Netherlands. I could not notice at all any symptoms of their burnout.

I found some explanations of the causes, but I thought that they were rather cursory explications. I imagine that deep causes exist beneath this issue. The modern society coaxes us to strive for achieving something that does not derive from individuals but from others or the society.

Social pressure to impel us in some activities without personal meanings might be one of the factors of burnout. Most people in this modern world might be candidates for burnout because they are likely to blindly follow social expectations or to try to achieve something recklessly that is devoid of personal meanings. 13:45, Wednesday, 9/20/2017

### 1560. 英文執筆と作曲実践の類似性

昨日、シンガポール国立大学が提供するオンライン作曲講座の二回目の視聴を終了した。文章を書くのと同じぐらいの自然さで曲を書くことから程遠いところにいるが、一回目の受講の時と比べて、作曲に関する技能が格段に向上したように思う。これは書物との向き合い方でも同じだが、何らかのテーマの講座についても、自らの手を動かしながら繰り返し講座を聞くことは、当該領域の知識と技術を深めることにつながる。

---

今日は夕食後の休憩として、MIDIキーボードで音を出しながら、音楽理論のテキストを読み返していく。昨夜も少しばかりこのテキストを読み返していたが、その時に、音楽理論が新たな言語体系として自分の内側に徐々に構築されている姿を見ることができて、確かな進歩を実感した。

音楽理論を学習する前の段階において、その全貌がよく見えず、作曲するに際してどれほど音楽理論を学ぶ必要があるのかがわからなかった。しかし、音楽理論を徐々に学び、それに並行して作曲実践を積み重ねていくことによって、作曲に必要な音楽理論の全体観を掴みつつあることは喜ばしい。

音楽理論もその他のいかなる学術理論と同じように、その世界は極めて深い。事実、音楽理論だけを取り扱った修士課程や博士課程も存在しているほどであるから、その探究には終わりはないのだろう。しかし、私は決して、音楽理論の専門家になろうとしているわけではない。音楽理論を活用しながら曲を生み出すことが何にもまして重要なのだ。

作曲実践をしていて頻繁に思うのは、それこそ英文執筆との類似性である。それが論文にせよ、日記にせよ、英語で文章を書くときには、英語の文法を知っている必要がある。しかし、英文を書くということが主目的である場合、いくら文法だけを学んでいても全く意味がないことは指摘するまでもないと思う。だが、この点に注意をしておかなければ、いつまで経っても実践を行うことをせず、理論だけを学び続けることになってしまう危険性がある。

作曲実践に関して、とりわけ注意をしているのはまさにこの点だ。昨日に二回目の視聴を終えた作曲講座の内容をもとに、改めて過去の偉大な音楽家の楽譜を眺めてみると、もちろん高度な建築性を要している曲は多数あるが、実はその建築性は音楽理論的な建築性というよりも、その作曲家の思想的な深みに由来していることが多いように思えてくる。

仮に音楽理論的に精密な建築性を有していたとしても、それは単一の難解な文法構造を用いて生み出されたものではなく、意外と単純な文法構造の組み合わせから生み出されていることが多いように思えてくる。上記の作曲講座の中で、私が度々感嘆の声を挙げたのは、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトらが、極めてシンプルな音楽文法を活用して、最上級の美を曲として表現している姿を目撃したからである。

---

英文を執筆しながらよく思うのは、確かに、文章の建築性をより高めるために、装飾的な表現技法があるのは確かである—例えば、ハイフンやセミコロンなど。しかし、こうした装飾表現には数に限りがあり、要はその使い所と使い方を具体的な文章例—論文や書籍—から掴み、それらを自分の文章の中で活用するという実践を積むのが重要に思える。少なくとも私は、文法書からそのような装飾表現を学んだことはほとんど無い。

作曲実践においても、装飾表現を具体的な作品という文脈の中で学び、それを自分の作品に活用していくという実践を行うのが賢明だろう。明日からは上記の作曲講座の三回目の視聴を始めるが、今回は前回以上に、自らの曲を作る過程で作曲技術を高めていこうと思う。その際に、現在履修中の学習理論を活用していくことも忘れずに行う。2017/9/18(月) 19:39

#### No.206: Non-APA and APA Style Writings

The assignment in the course of “Evidence-Based Education” is creating a school improvement plan that aims to ameliorate school issues. The assignment has two parts; (1) a report for relevant stakeholders such as school boards, school leaders, and teachers and (2) an appendix to support the selected evidence-based school improvement interventions, which is written for educational researchers.

I suddenly realized the importance of the two different styles of writings. The former is basically for educational practitioners, whereas the latter is mainly for educational scientists. Therefore, the former should be written plainly in non-APA style, while the latter should be written in APA style.

Personally, utilizing both styles is significant for my professional work because I conduct scientific research and also collaborate with practitioners. I need to elaborate my writing skills for the two styles in order to communicate with both scientists and practitioners through writings.

Sophisticated and accessible writings would be a key. 15:57, Wednesday, 9/20/2017